私はこう考える

「私の考えるPCIとCABGの境界」

プランナー

京都大学循環器内科　木村 剛

「PCIとCABGの境界」は古くから議論されてきた話題です．バルーン血管形成術時代やベアメタルステント時代にもPCIとCABGを比較する無作為化試験は多数報告されてきました．しかしながら，これらの試験に登録される患者は日常臨床においてPCIが施行されてきた範囲内の患者であって，かつ5年生存率にも大きな差がなかったことから，これらの試験結果が一般的な診療プラクティスを変えることには繋がってきませんでした．一方でSYNTAX試験はこれまで一般的にはCABGで治療されてきた左主幹部疾患や重症3枝疾患を対照としており，その結果はAHA/ACCガイドラインの改訂に繋がり，一般的な診療プラクティスも変えようとしています．ただ左主幹部疾患に対するPCIが解禁になった（?）とはいえ，全ての左主幹部疾患においてPCIの選択が妥当である筈はなく，日常診療における「PCIとCABGの境界」を規定することは重要なテーマです．本企画では4人のエキスパートの先生に症例を中心として，重症冠動脈疾患における冠動脈血行再建法選択の考え方を御呈示いただきました．日常臨床における治療法選択の一助としていただければ幸いです．